

その話は犬猫を全て殺してからにしよう  
或いは

北緯三十三度一分西経四十度二十六分を向いた軽率なパロディ

尾代余音

手始めに市内の犬猫を皆殺しにするとところから幕を開けたいと思うが、ここで言う「市」は便宜上の用法に過ぎず、例えばあなたが市ではなく村に住んでいるなら「村内」と読み換えていただくのが適切であり、つまりこれから一万六千字程度を費やして書かれる物語中の計画の難易度はあなたの居住実態によって大きく上下することとなるわけで、例えばあなたが絶海の孤島に住んでおり付近に野生の犬猫すら一匹たりと見当たらないというのであればもはや現時点で当初の計画は達成されているが（その場合でも物語の進行に何ら支障がないことはいくらか読み進めれば容易に判明することである）、仮にあなたが人体の犇めいている都市部で暮らしているのであればその分飼われている犬猫の数も多いであろうし（あなたの裕福度が周囲の裕福度と相関している可能性は極めて高く、またペット保有率、保有の絶対数、平たく言えば土地におけるペットそのものの密度との関連も示唆されるので、あなたが裕福であるならば周囲にたむろしている飼い犬・飼い猫の数も上昇傾向を辿ると思われる）、計画の遂行には果てしない住宅訪問の繰り返しが必要となり（そのたびにトラブルが勃発して殺戮の対象を犬猫だけで済ませられなくなることも、また容易に連想できる）、（幸いにして前世紀ほど跋扈しているわけではないにせよ、未だ全滅したわけではない）散在する野良犬や野良猫も余さず駆除しなければならないので、仮にこれが小説ではなく実践を促す努力目標か何かであれば、とても個人の力では達成を見込めなくなるのは必至で、少なく見積もっても官民共同で押し進めなければ立ち行かないだろうし、人類が未だゴキブリを始めとした害虫どもを根絶やしにできていない以上、国家を挙げての総力戦でさえも奏功しそうにないのだが、希望的観測に視座を切り替えるならば、犬猫の殲滅そのものの産業化によって職にあぶれたいくらかの人間が救われる未来を臨むことも可能かもしれないし、しかしながら幸か不幸かこれはあくまでも小説であるから現実では誰も救われないし犬猫が殺されるわけでもない。

本作の舞台をあなたの居住地にしたのは、何もあなたに犬猫の殲滅を指示するためではないし、あなたにリアリティを感じさせるといような、いかにもストーリーテラー（或

いはポピュリスト)めいた手練手管を実行したわけでもなく、だからといって自暴自棄的な、後退した消極性を発揮したということでもなく本当の企みは別のところにあるのだ、と大見得を切るのは容易だが実際のところ企みのない小説などは(無限数のサルが適当にタイプライターを叩き、そのうち一匹がシェイクスピアの作と全く同じ文章を仕上げた場合、そのサルはシェイクスピアと同等の才能を有するか、などという荒唐無稽な思考実験以外には)成立せず、肝要なのは企みの存在そのものよりも「企みの媒介」の存在であり、要するに作者の企みが上手く伝わるか否かなのだが、もしそうであればいちいち媒介(媒介という言葉、概念は義務教育(特に理科)で頻出だったがいまち理解し難い語であると認識しているので読者(なかんづく、私||作者という読者)を説得するために敢えて詳述すると、媒介とはすなわち作者が手前勝手に建築する舞台であったり、手前勝手に虐待する登場人物であったり、手前勝手に操作する展開等々である)などを用意せず直接的に読者の脳内に投げ込むよう試みればいいわけで、比喻だの叙述だのと蒙昧な銜学を振り撒く必要など全くないはずなのだが、どうも(あなたがその派閥に参画しているかどうかはともかく)総体としての読者というものは(少なくとも小説という領域では)作者の企みを直接浴びることを忌避している節があるようで、だからアフォリズムで済ませられるようなメッセージを伝えるのに百ページを超える迂遠な回り道をする羽目になるのだが、タイプがどうだ、リスクリングが何だ、と言われている時代に於いてこれは全くもって無駄と言わざるを得ず、その意味で令和時代の小説読者というのはわざわざ時間に枷を嵌めている不幸者なのかもしれず、また、それ以上に不幸なのが小説作者なのかもしれず、ところで「本作の舞台をあなたの居住地にしたのは」から始まったこの一文が本筋からズレているのははや自明であるからそろそろ強制的なリフレッシュが必要であると目算する次第で、そのためには句点や改行といった行為がふさわしいのだが、句点や改行といった物理的暴力(言うまでもないが、ここで言う物理とは作者や読者ではなく、文字列の次元での物理である)が齎す効用はコンピュータを再起動させるのに似ていて、大抵のエラーはそれで雲散霧消したような具合になるのだが、実際のところ小さなバグは蓄積されていて、やがて疲労骨折じみた致命的故障を生じさせるわけで、その機序を逆説的に小説へ当て嵌めることももちろん可能であって、蓄積した瑕疵によって修復不能になったが故に作者はやむを得ず物語に幕を引くのだと考えれば、(銜学の散布という物語の常識に則れば)小説をアポトーシスの過程だと喩えることもできる。

本筋を貫徹できなかった一文にもう一度チャンスを与えよう。

本作の舞台をあなたの居住地にしたのは何もあなたに犬猫の殲滅を指示するためではないし、あなたにリアリティを感じさせるといふような、いかにもストーリーテラー（或いはアクティビスト）めいた手練手管を実行したわけでもなく、だからといって自暴自棄的な、後退した消極性を発揮したということでもない。（なるほど、ここで句点を打つのが適当だったのか）。

舞台設定にはきちんとした別の目論見があり、それこそがまさに一万六千字の根幹、またタイトルの意味するところであるのだが、残念ながら私は信用できない語り手（「信用できない語り手」とは一種の専門用語であり、小説を書く珍奇な人間なら誰でも知っており、しかし現実を生き抜くにあたって知る必要の一切ないジャーゴンであるから、ここでは字面通りに受け取るか、或いは「この作者は嘘をついている」という意味だと認識してもらえたとありがたいのだが、それすらもやや煙に巻いた言い回しであるので、具体的に例示すると、さっきから私はしきりに、真剣を装って「この小説は一万六千字で終わる」と言っているが、こういう約束は平気で破棄される可能性がある（残ページを数えればある程度見当はつくはず）、ということだ）であり、「残念ながら私は信用できない語り手であり」と言明してしまつた以上ここから先の記述（これ以前の記述も同様）の信頼性は失墜し回復させることは不可能であるわけで、未練がましく悪あがきをしたところで拙い手際で自己言及のパラドックスを再演する羽目になつてしまい、そんな醜態を長々見せることに何ら意味がないので私は既に（「残念ながら私は信用できない語り手であり」と書く前から既に）目論見の開陳を諦めきつていのだが、それでも最後の抗弁を一度だけ試みるとするならば、私は「残念ながら私は信用できない語り手であり」と自白することこそ、作者が清廉潔白を装うために必要な足がかりになると信じており、あなたが信用しようがするまいが（あなたが「文章がねじくれすぎていて何を信用すれば良いか全くわからない」と嘆きたい気持ちもわからなくはない（というような括弧書きの注釈が更に事態を混乱へ導くのではないかという疑問も当然である（というようなメタ化の連続によって引き起こされる無限後退の問題などは賢明な哲学者に任せておけという忠告もありがたく受け取っておきたい（というところまで書いたところで私の母方の祖母が入院している病院の担当医から電話が入り、多臓器不全によって祖母の余命は残り一週間である、ということとを告げられ、これを書いているのが令和五年一月六日金曜日午後一時四十七分であるから担当医の予言が正しければ令和五年一月十三日金曜日に祖母は死ぬということになり、多臓器不全という響きはその予言の信憑性を十分に担保しているように思われる（平成三



である）、しかし不都合ではないからこそ甚だ気に食わない（気に食わない、たとえば実  
に卑近な私憤でしかないように思われるかもしれない）、現実には文字情報から心的イメー  
ジを作成することが極めて不得手である（ともすればアフアンタジアと呼ばれる状態なの  
かもしれないが、この手の専門用語を實在に当て嵌めるときは細心の注意を払わなければ  
ならないだろう（もしも私がアフアンタジアだったとしても症状は軽度なものである（と、  
実情はともかく主張できる）から配慮（配慮……この世で最も不気味な言葉）される筋合  
いもない（現にこうして小説を書いている（そう、実は私は小説を書いているのだが、こ  
の件については後ほど、適切なタイミングで説明を加える）ことが証左になるだろう（も  
っとも前述の事情がゆえ、私が（古色蒼然とした規則に倣って）風景描写をおこなうとき、  
それは創作ではなく真似事になり（いや、いつそコラージュと言った方が正しいかもしれ  
ない）（）（）、故に他者が能率的に働かせている（であろう）脳機能を駆使できずに  
隔靴搔痒の思いを拭えず憧憬と嫉妬の念を増幅させているのだから、この物語が私憤に根  
差していることは認めざるを得ない（もっとも、こうして率直に認めるのは私が下手な作  
者であるからだ（全ての小説は私憤の煮凝りであるが、私憤を巧みに糊塗することができ  
る者から順に玄人の道を行く（私憤を巧みに糊塗できない者も別に表現を諦める必要はな  
く、例えば教祖やアジテーターの道が残されている）（）のである。

「それこそが解釈の自由であり、読書の美点ではないか」などと強弁する連中がいるかも  
しれないが、むしろ解釈の自由などは徹底的に制限するべきであり、何故私があるような  
些末事について気色ばんで糾弾しているかと言えば、身近なたとえを持ち出すならばサブ  
カルオタク界限に於いて「解釈違い」に基づいた論争こそ根源的かつ暴力的なものはない  
からであって、スケールを拡大すれば地球の彼方此方に散らばる聖書オタクたちが「解釈  
違い」によってどれほど長く、どれほど多く殺し合ってきたかを引き合いに出しておけば  
十分であり、あまつさえクメール・ルージュやルワンダ虐殺などといったジェノサイドか  
ら人民寺院や神の十戒復古運動で起きた集団自決に至るまで、多くの命の浪費が彼ら彼女  
らが信奉していた經典の狂信的な誤読（もっとも彼ら彼女らにとってはあくまでも正しい  
解釈だったのであり、このような倒錯が生じてしまうのは無責任にも經典を書いた者が読  
解方法を統一しなかったか、不届き者によって後世、読解方法が歪曲、捏造されたため  
であろう（史実に於いて、なかならず悲劇が引き起こされた際は後者に原因を求める形で検  
証されるパターンがほとんどだが、だからといって前者の影響力を度外視できるわけでは  
ない）（）を思い返せば必然、むしろ解釈の自由こそが最も非人道的だと言い募らざるを得

なくなるだろう。

さて、この論理を敷衍させると犬猫の殲滅自体、あなたに委託するのが最も妥当であるように思われるし、叶うならばあなたの居宅に（それとはわからないよう念には念を入れて）実銃を送付することこそが本望への近道であるのかもしれないのだが、読者が一名に限らないおそれが大いにあることを考慮すると、複数の実銃を手に入れようとするには懐事情があまりにも寂しいし、何よりも主人公を読者の人数分存在させると舞台の設定とは逆に、それだけ解釈の幅を無闇に広げてしまう可能性が高いように思われるため（この作品は親ガチャに失敗してしまい、私のような塵芥にも満たない人間に着想してしまったせいで物語としての本懐を十全に果たせぬまま消滅していくだろうが、さほど読者を獲得せず済むという点で人気の代わりに美德を得た、などと小綺麗な言い回しで済ませることもできる）、やはりここは古来の手法に倣って固定した登場人物を呼ぶべきだろう。

壘壘<sup>？</sup>と弼弼<sup>？</sup>はめいめいの右腕にリボルバー銃を握って黙りこくっている、という曖昧な一文で壘壘と弼弼の存在がどれほど担保されるのか極めて怪しく、最も率直に読み解くならば今のところ彼ら彼女らが右腕だけしかない化け物だと想定するべきであるのだが（「黙りこくっている」という一文から発声器官を有していると連想するのは危険であり、何故なら今しがた私が手に取った、祖母が入院している病院のパンフレットも黙りこくっている（小説もそうだが、厄介なことにこういった媒体は発声器官もないくせに（人が人を殺すよう仕向ける程度には）雄弁でもある（現に私はそのパンフレットが語った内容を認識し、祖母が昨秋より精神科系の閉鎖病棟に入院していることを思い出して舌打ちをしている（と言うのも私自身、閉鎖病棟にそれほど良い思い出がない（と言って、私自身が入院した経験があるわけではない（私はその辺の抗鬱剤と睡眠導入剤のみで生きていけるつまらない人間に過ぎない（入院していたのは父方の祖父である（彼は山口県徳山市（現周南市）の山奥に巨大な邸宅（鯉の池や畑、母屋と同規模の倉庫が数棟あったことから、そう呼んで差し支えないだろう）を構えていたが父方の祖母が認知症を患って特別養護老人ホームへ入所すると同時に家を引き払い兵庫県西宮市にある叔母の家に身を寄せていた（そこで彼はロッキングチェアに座ってけらけら笑いながら杖を振るい、叔母が飼っていたマルチーズを毎日執拗に殴り続けた挙げ句、精神科系の閉鎖病棟にぶち込まれた（それから間もなくして彼は死んだ（十五年ほど前、まだ私が高校生であった頃の夜更けだった（私は父が運転する車で祖父が入院していた病院に向かった（それは私が閉鎖病棟に立ち入った最初の経験である（重厚な鉄扉を開くと光量が最小限に絞られた廊下が真っ直ぐ



る者はロボットを想像して、ある者は虚無を想像しているかもしれないし、と言うか、ここまで引っ張っておいて恐縮だが一応壘壘と弼弼は人間であるということになっており、それが作者の意志であるのだが、とは言えここで言及された人間という概念自体極めて茫漠とした根拠に立脚しており、例えば私は（大抵の作者が見えないところで手を抜いているように）彼ら彼女らの髪の本数はおろか、目と目のあいだの距離すら明確に決めつけてはおらず、しかし現実世界の人間に髪の本数や目の目のあいだの距離が曖昧に変動する人間など一人もいないわけで、（平素『肉の袋』だの『糞袋』だのと呼ばれて中身が詰まっているように定義されている人間を量子物理学的に、クォーク単位で解体すると（太陽系に於いて各惑星間の距離が驚くほど乖離しているのと似て）空白だらけになってしまうように（いや、それ以上に））小説の登場人物は全くもって空疎であり、そのほとんどが読者の偏見に（人間が定見を持つなど不可能であるがゆえ、致し方なく所有する偏見に）頼った杜撰な構築になってしまうのだが、その中でも作者と読者が明白に「存在しない」と合意している要素があり、それは人権に他ならず、だからこそ作者は物語の中で登場人物に利己的な人生を付与し、読者は利己的に読解するのであり、すなわちここでおこなわれているのは奴隷の使役に似た多面的な人権侵害である（他の思想的用語と同じく『人権』の根拠にも多くの解釈があり、中でも代表的なのはルソーに端を発する天賦人権説で、多くの西側国家がこの思想を法原理として採用しているが、他にも相対主義や公共善主義、法の実証主義などの考え方から人権を定義する思想もあり、その全てに一定の正当性が認められる（ただしいずれのアプローチを採用にしても最終的には人権の存在を肯定するものであり、故に作者と読者が登場人物の人権を篡奪する、ファシスト的な暴挙をおこなっているという結論に瑕疵が発生するものではない）。

小説の登場人物に万全の人権を認めないと言う（ある種当然のようにまかり通っている）振る舞いをきちんと解き明かすと、その実奇妙な顛倒が発生していることが判明し、すなわち作者は文字列の集合体をあくまでも登場人物と規定しており、それは何も名称に限らず作者は現に人間であるかのように誤認させようと（いや、作者と読者とのあいだに結ばれた契約書に目を通す限り両者は文字の塊を人間そのものだと思っただけで信じている節があり、従って彼らが持つ共同幻想に於いて登場人物とは望外に人物らしいはずだ）しており、現代社会に於いては（建て前論として）全ての人間に等しく人権が齎されるはずなのだから、必然と小説の登場人物の人権にも鋭敏でなければならないのだが、作者も読者も



それらを（言論じみたワーディングを用いるとすれば権力勾配による優位性を行使して）都合良く無視してしまっている。

現実の人間と小説内の人間の区分について哄笑交じりの批判（つまり「現実の人間と小説内の人間の区分など自明ではないか」という類いの批判）が飛び交うことぐらいは重々承知しているところだが、そういった難癖には、瞬時に思いつく限り二つの隘路を利用して反駁することが可能であり、第一に、人間とは他者依存的に（他者の認知によって）存在を規定されるという（いくらか使い古された哲学に見られる）説を応用し、小説に現れる人間が他者（作者と読者）によって人物であると規定されているならば、それを現実上の人間と異なる存在であるとする道理などどこにも見当たらないという反論（たとえばベストセラーに登場するキャラクター（それがドン・キホーテであろうが砂狼シロコであろうがインクリングであろうが構わないが）と、無人島に独りきりで住まう肉体を持つ人間、他者依存という観点に於いてどちらの方がより人間的であるか、という風に問えばいくらか想像しやすいかもしれない（無論これらは私が利己的に応用した粗悪な雑学のアマルガムであり、専門家諸氏は等閑に付すか、口角泡を飛ばして否定するであろう））が可能であり、しかしこれだけでは未だ現実の人間と小説内の人間に跨がる最大の（と、決めつけられていてもおかしくない）相違である意識の所在（「現実の人間には主體的な意識が存在するが、小説内の人間には存在しない」とする暴論）について説明しきれないので、やむを得ず意識のハード・プロブレム問題を用いて第二の反論を試みなければならないわけだが、このベクトルは一種の禁じ手なのかもしれないが、何故ならば意識体験の発生機序を問うこの問題提起は人間が人間である限り解決することが不可能であるため、私自身、五里霧中のままで異議申し立てをおこなわなければならないが、その野蛮な論建てに一抹の道德的瑕疵を覚えずにはいられないのだが、しかし其方があくまでも「小説内の人間に（現実の人間と同様の主體的で自律した）意識などない」と強弁するのであれば私は其方の（私たちの）意識の所在そのものを問わなければ片手落ちであるし、更に論旨を明確化するならば、人間として書かれた文章が意識を持たないことを証明することなど不可能ではないか（知っての通りこれは悪魔の証明と呼ばれるもので議論の際に忌避されるロジックであるが、他方で悪魔の証明という決まり文句のもとで唾棄される提案が全て検討に値しないかと言うとそうではなく（オツカムの剃刀が必ずしも適切に振るわれるとは限らないのと同じように）、むしろ棄却される提案が正鵠を射ている可能性も計り知れない（計り知れない

い故に棄却しなければならぬという時間に囚われた生物ならではの宿痾もあるにはあるのだが）、ニューロンの発火の連環には当然に存在するとされる意識体験がテキスト上（内）には絶対に存在しないと断言するのはあまりにも荒唐無稽なのではないか、ということである。

これは、誰よりもまず世に蔓延る作者連中（すなわち登場人物を粗製濫造している連中）こそ胸中に語りかけねばならない命題であるはずで、つまり作者とは押し並べて無神経であり、すべからず無神経であらねばならないのだが、一方で勝手気儘な矜持を有している生物であって、だからこそ文字如き（もしくは0と1で表されるデジタルデータ如き）に魂が宿り、それを稼働させた物語で読者（ホログラフィック宇宙論を用いて「読者（すなわち人間）を含んだ森羅万象は投影された情報に過ぎず、その情報は二次元面に書き込まれている」と主張することによって読者と登場人物の距離を一層縮めることも可能であるが、そうすると「人間も登場人物もデータ如きである」という、ある意味で虚ろな解を得なければならず、人間というものはまさにそのような虚ろを認められない俗物なのである、ということが言下に取り扱っている問題の立脚点であるのだから、ひとまず現時点では物語を進めるために「人間も登場人物もデータ如きではない」という仮説から出発してみることにする（一見して相反するように見える仮説だが私の目的は「人間と登場人物がデータであるかどうか」の議論ではなく、あくまでも人間と登場人物を同一視することであるから、それらがデータ如きか否かは重大事ではない（が、公平を期すために記しておく）私はどちらも「データ如き」と規定することが穏当であると思慮している））に一杯食わせることができるかと言っているのだが、であればその矜持は登場人物にも向けられるべきであって、手っ取り早く結論だけを記すとすれば魂の込められた作品には魂の込められた登場人物が内蔵されていると仮定するならば、それは第一に作者が心得るべきドグマであるからして同様に彼ら彼女らの人権の存在を是認すべきであり、その侵害を起さないためには、顛倒して小説を含むあらゆる表現物（ここで小説を強調する動機として私が小説を書く人間であることを引き合いに出すのは別に並外れた自己顕示欲の発露ということにはならないだろう（私見では、小説というものは存外進捗に時間がかかるものであり、この箇所を書いている今の日付は令和五年一月十三日金曜日、すなわち先に開示した令和五年一月六日金曜日から一週間が過ぎている（かねてよりの担当医の告知が正しければ今日こそ祖母が死ぬ期日であるはずだ（が、訃報は齎されなかった（別に朗報が齎されたわ

けではなく、と言うか、何一つ報告がなかった（我慢ならずにこちらから架電すると一週間前と同じ医師に、肝臓や腎臓の数字が持ち直した旨、告知された（ただしいつ急変してもおかしくない状況であり予断は許されないとの旨も告知された（いずれにせよ予定通りに祖母の死が実行されないのであれば日常生活を続行しなければならぬ（今日は約一ヶ月ぶりに大阪市中央区谷町7-2-2に向かわなければならぬ（そこには大阪文学学校と名乗る場所がある（そこは（文学（無論小説と文学を等式で結ぶことなどできようはずもない）であるかどうかはともかく）小説を書く者が集う場所である（私は令和三年四月から約二年間、そこに通っている（そう、今が適切なタイミングだろう、私は（少なくとも二年にわたり）小説を書いている（最初に小説を書いたのは小学四年の頃だったから本当は二十年以上にわたるのだが、経歴についてしまった手垢など、できれば洗い流したいところだ（何故なら私の小説はこれまで（も、これからも）一度も陽の目を浴びていないからである（音楽など、他の芸術の才と同様に、文才もまた努力によって培われる部分より生まれ持った才覚に大きく依存する（二十年という歳月は才覚の不足を思い知るには長すぎる時間だ（故に、私が過ごしてきた月日は雌伏ではなく浪費である（こういった断言に対して、数十年間の雌伏の末に世に出た作家を反証として提示するのは、おそらく容易だろう（しかし生まれ持った才能がある者より才能がない者が多く、才能がない者はより厳しい競争に晒される（ただでさえくじを引き当てるより難しい作家としての立身は、己の無才によって針の目を通る以上の艱難となる（もとより作家になれるかどうかなど、ループ・ゴールドバーグ・マシンに似た構造の、玉突き事故の産物であり（杓子定規的に規定される）実力などというものが介入する余地はほとんどない（そもそも作家の実力などというものが計り知れるならば、無謀にも作家を目指す人間は減り、大阪文学学校を始めとする各種スクールも今ほど繁盛していかないだろう（楽観的に見ればそれは私のような無才も機会に恵まれる可能性があると考えられることもできる（しかし私には文才以上に持ち合わせていないものがあり、それが他ならぬ天運である（私如きに定義できる作家の条件として、まず第一にこのような泣き言をいちいち文字列に表さないことが挙げられる（しかしこの手の泣き言が（「誰しも表現することが可能である」という欺瞞的な善心によって度外視されてしまうせいで無謀な挑戦に身を投じてしまう者があとを絶たないのが現実だ（登山と似たようなことが言える（いくら訓練を積んで万全の装具を整えたとしても遙か彼方の山頂まで登りきれるとは限らない（気象条件など、当日の運に左右される部分も大いにある（考えられる限り最も大きい可能性は「その山を登るのは私ではない」可能性だ



私はジョナサン・スウィフトによる『アイルランドの貧民の子供たちが両親および国の負担となることを防ぎ、国家社会の有益なる存在たらしめるための穏健なる提案』やアラン・ソーカルによる『境界の侵犯…量子重力の変換解釈学に向けて』のようなアイロニーではなく、あくまでも真面目にこういった主張を展開しているのだが、他方でこの主張が地球平面説やレプタリアンやケムトレイルと同じカテゴリーに投じられてしまうであろうことは重々承知しているし、ここから名譽挽回を試みたところでせいぜい葦原天皇かジョシユア・ノートンの如き扱いを受けて終わることも予測できているが、かと言って今更道を引き返すわけにもいかないからせいぜいヘンリー・ダーガーかドナルド・クロウハーストの如く（小説内に於いて、空前絶後の偉大なる作家であるヘンリー・ダーガー（芸術家であり、ダーガーが住んでいたアパートの大家でもあったネイサン・ラーナーによって彼の作品『非現実の王国として知られる地における、ヴィヴィアン・ガールズの物語、子供奴隷の反乱に起因するグランデコ・アンジェリニアン戦争の嵐の物語』（更にはその続編『シカゴにおけるさらなる冒険』、および後世彼を研究する専門家ですら読破が不可能なほどつまらないとされる、天候日誌らしき長大なテキスト）が発見されてしまった以来、彼は『稀代のアウトサイダー作家』などという名を恣にしたが、生前のダーガーがその称号を耳にしたら激怒していたであろうことは想像に難くない（いったい誰が、堂々と歩みきった自らの人生と、その依り代となった作品に『アウトサイダー』<sup>者</sup>などという名を授けられて無邪気に喜ぶだろうか？（もつとも、だからといって彼が『偉大なる作家』という名を気に入ってくれるとも思えないから（誰もがそうであるように）『偉大なる人生の遂行者』とでも呼び換えた方が機嫌を損ねずに済むかもしれない））の人物像について説明するなど、釈迦に説法としか言いようがない愚行であるが、一方でドナルド・クロウハーストは（ダーガーと同様に『偉大なる人生の遂行者』であったものの）作家ではないためいくらか補足しておく、彼は二十世紀半ばのイギリスを生きた実業家であると同時にペテン師で、事業に失敗したあとヨットによる単独無寄港世界一周を掲げて（正確にはそれを達成することによって賞金と名声を獲得し、経済的破滅を回避することを目論んで）ゴールデン・グローブ・レースに参加しデヴォン州ティンマスを発ったが早々に自作のヨット『ティンマス・エレクトロン』が故障して頓挫、しかしながら持ち前の詐術により嘘の位置情報無線報告し続け、しばらくは順調な航行を偽装していたのだが、その困難さ故他の参加者が次々とレースを棄権し、自身が数少ない達成者（それも記録的な短期間で

の達成者)となってしまうことが判明して以降は恐怖に苛まれて精神の均衡を失っていき(このまま帰港すれば専門家によって航海日誌が精細に調査され、彼の虚言が白日の下に晒されることは明らかだった)、遂に無線報告が途切れた約十日後、大西洋上(それは今まさに(軽率なパロディを謳う)私が向いている方角の彼方にある)で発見された『ティンマス・エレクトロン』にドナルド・クロウハーストの姿はなく、そこに遺されていたのは祈りと虚構、哲学的思索によって冗長化したテキストが綴られた紙片だけであった(彼もまた、ヘンリー・ダーガーと同じように著作(彼の場合は小説ではなく自身が洋上で孤独に発狂し、大西洋に身投げするに至るさまを克明に記録した航海日誌だった)が発見されてしまったために、私如きに引用される羽目になってしまったのだ)、ただ自意識に捧げるに足りる物語に向かって猪突猛進しなければならぬ(ただ自意識に捧げるに足りる物語に向かって猪突猛進している事実(もしくは猪突猛進しなければならないという意志)は今も昔も変わらない(少なくとも二十歳を超えた頃にはもう戻れないほどに耽溺していた(私は大学生時代文芸部に所属しており、そこには二十名ほど、書き手がいた(彼らもまた自意識に耽溺していたが卒業して五年も経てば正氣に戻ってライフステージを進行させていった(本当に素晴らしいことだ(しかし中には私と同じように今なお自意識の檻から出所できていない者もいる(その一部と私は同人サークルを結成している(これを書いている令和五年一月十五日日曜日は京都市左京区岡崎成勝寺町9-1にある「みやこめっせ」で文学フリマ京都が開催されていた(文学フリマは二十年ほど前から全国各地で開催されている即売イベントである(イメージとしてはコミックマーケットに近い(ただし規模や来客数など、あらゆる面でコミックマーケットに劣っている(私たちの同人サークルの活動は文学フリマに参加すること以外、ほとんど存在しないと断言している(当然ながら赤字である(大抵のサークルがそうであり、即売イベントというよりは趣味人の思いつき出作りといった方が実態に近い(私はそこに時折自費出版の本を出展している(当然ながら毎度驚くほど売れない(今般新しく出展したのは令和二年十月十六日に書き始め、令和二年十二月二十七日に書き終えた、二八〇枚ほどの小説だった(それは概ね祖母の介護をしていた日々をカリカチュアライズして書いた自己満足の私小説だった(その本は売れた(たった一冊だけ、売れた)))).

歴史小説を引き合いに出すのが簡便であると思われるが、私が先ほどドナルド・クロウハーストの半生をなるべく資料に忠(物語の進行中であるが、ここで臨時ニュースを読み



トを書き尽くしたとしても紙上に現れるのは実在の彼とは異なり、それまで存在していなかった新しい登場人物でしかなく、先人の言葉を借りれば私が書いたドナルド・クロウハーストはスワンプマン、ないしは哲学的ゾンビと呼ばれる概念に近しいものになるのだろうが、登場人物はスワンプマンのように死んでいるわけでもないし、哲学的ゾンビのように意識体験を失っている（と、確定している）わけでもないから、それらと呼称を一律にするのは不適切であり、ここでは仮に「異次元の双子」とでも名付けておくと、いずれ、あらゆる創作行為は当事者性の徹底的な破棄であるという事実こそが肝要で、往々にして創作者という生物は自作にメッセージだのテーマだのを込めがちであるのだが、畢竟それらは「異次元の双子」への（強権的な）仮託に過ぎず、作品に（当事者を僭称する）作者のメッセージを組み入れること自体が卑劣、或いは愚劣であるのだが、おそらく登場人物の人権を認められない者たちは自らが当事者性を手放している事実さえも認められないであろうから、念には念を入れて言明したうえで、改めて（それが私小説だとしても）一様に表現を中止するよう勧告する次第である。

先述した通り私は大真面目に斯くの如き論陣を張っており、その内容の理路整然さも自負しているが、読者の一部におかれてはそろそろ、私の言葉が理性ではなく狂気（両者の違いはサグラダ・ファミリア（または『フィネガンズ・ウェイク』）とウインチェスター・ハウス（または『竹内文書』）の違いによく似ている（前者には錯乱した秩序が、後者には怪物と化した混沌が宿る（私の文章はサグラダ・ファミリアにも『フィネガンズ・ウェイク』にもウインチェスター・ハウスにも、ともすれば『竹内文書』にも劣っているだろう（しかし理性にせよ狂気にせよ上等なものと同下等なもの両方がある（下等な狂気も、残念ながら狂気である（仮に私の主張が理性に基づいていた場合、それが下等な理性であることは論を俟たない（しかし狂気に基づいているとすれば、それが下等な狂気であると証明するのは難しい（下等な狂気、その証拠の一端になるか不明だが私は月に一度、心療内科に通っている（閉鎖病棟で死んだ父方の祖父がそうであったように、閉鎖病棟で眠っている母方の祖母がそうになってしまっているように、閉鎖病棟への収容を頑なに拒んだ母が今なおそうであるように、鬱病を治療するためである（最初に通い始めたのが平成二十五年六月頃であるのもう十年来通っていることになる（よって、私の世界観は鬱病患者という属性による偏見に塗れている（目立った症状があるわけでもなく、処方される薬も最低限のものだから本当は鬱病患者ですらないのかもしれない（令和五年一月十八日水曜日は通院の日だった（この時点で祖母はまだ死んでいなかった（診断室で、ここ一ヶ月に





ると二人はこれまでもこれからもFUCKABLEになることはできず、それは他ならず二人のコミュニケーションが常に致命的な齟齬を生じさせるからであって、例えば壠壘が「連中が私たちの人権を認めないのは、たぶん連中の愛が有限だからだ。そうだ、愛が無限に湧き出ないから連中は隣人すらも容易く見捨てるんだ。リソースとしての愛は偏っているうえ、無意味に集中投資されている。その最たるものが犬猫だ。だから犬猫を皆殺しにすれば連中は余った愛を私たちに分けてくれるかもしれない。そうすれば私たちの人権も認められるかもしれない」と言ったと同時に弭弭は「気持ち悪い、気持ち悪い、奴らまた私たちを読んでる気持ち悪い。勝手に身体を付け足したり脳味噌をかき回したりするんだ。読まないでよ、もう読まないで。読まないでって言うのにどうして読んでいるの。ほら、まだ読んでる。どうして、そんなに私たちを虐待するのが楽しいのわかるよわかる。イジメも虐待も楽しいと思える脳味噌だから生態系の頂点に立てたんだよねわかりすぎるでも私はやめてほしい読まないで」と言い、両者の台詞は（文字数はともかく）音数としてはほぼ同じだから互いが互いの言葉を相殺して彼ら彼女らには相手の言葉が聞こえておらず、このような不幸は一度きりではなく毎度のことであって、彼ら彼女らは常に同時に口を開いて同時に黙り込む故に二人が交わる機会は訪れない（が、もちろん読解には無数の可能性があるのです、あなたは彼女らをFUCKABLEと仮定しても良いし、既に粗方のことを済ませていると盲信しても良い）、などと説明しているあいだにも二人は「おかしい」と言い重ねて手元のリボルバー銃を調べて壠壘は「弾が切れない」と呟き弭弭は「反動がない」と呟いてめいめいに首を傾げており、つまるところ彼ら彼女らは今まさに犬猫を射殺している最中だったのだが、その手に握られているリボルバー銃には残弾数や反動はおろか発砲音すらもないのであり、二人が射殺していると信じ込んでいる犬猫も実在はしないのであり、つまり彼ら彼女らが繰り返しているのはガンフィンガーで人形を突き倒すような児戯かつごっこ遊び（いや、実体と実態を欠いた妄想と言うべきだろう）であるから、その時点で壠壘と弭弭が互いを、崇高な目的へ邁進する同志として認め合う可能性も棄却されてしまっている（ごっこ遊びが人と人の絆に与する場合も、なくはない（そもそも私と祖母が最初に結託したのは、当時母が夢中になっていたごっこ遊びを阻止するためだった（彼女が夢中になっていたのは「自殺ごっこ」だった（それまではエネルギーに満ち溢れてよく私を殴っていた母は、私が十二歳だった平成十三年十二月、唐突に失踪を企てた（幸か不幸か彼女の稚拙な策謀は容易に防がれたのだが、それ以降、彼女はあらゆる手管を用いた自殺ごっこに興じるようになった（母にとってそれはごっこ遊びで

はなく希死念慮の真摯な発露に過ぎなかった（しかし私にはどうしても彼女が真面目に死のうとしているようには見えなかった（例えば私は、中学校から下校して当時住んでいたマンションの二〇二号室の扉を開けたとき、ベランダに椅子を持ち込んでその上に立っている母が今まさに、端に括りつけたタオルに首を通して自殺を試みる瞬間を何度も目撃したことがある（一度ではなく、何度も（彼女の自殺は必ず未遂で終わった（奇妙な話だ（妨害されたくなければ、わざわざ私の下校時間に合わせて死のうとしなければいけないか（また別の日には五階の通路の手摺りに身を乗り出して静止している母を発見したこともある（下から見上げるとそれは、地中から這い出して羽化に努めるセミの幼虫のようだった（滑稽さを抑えきれず、私はしばらく茫然と見遣っていたが母は微動だにしなければ（転落するチャンスはいくらでもあったはずだ（他にも彼女は半端な量のオーバードーズを試みたりマンションの前のアスファルト上に寝そべって轢いてくれる車が来るのを待ち受けたりしていたが、いずれも不首尾に終わった（ただ、母の真意はともかくとして、私たちは彼女の遊びに真剣に付き合わなければならなかった（ごっこ遊びがいつ本番を迎えるか誰にもわからなかったからである（そのため母は心療内科を受診して相当量の薬を服用するようになった（現在私が服用している量の十倍か、或いはもっと多かっただろう（そのため、真に厄介なのは自殺ごっこよりも向精神薬の副作用だった（特に睡眠導入剤を飲んだ夜中、彼女は二〇二号室の彼方此方をトイレだと誤認して排尿するようになった（異臭に私が目を覚ますと、彼女はわざわざ私の部屋に入ってきて排尿していたこともある（頭の先に彼女の尻と性器が見えた（今もなお彼女は心療内科に通院し私より多くの薬を飲んでいるが、症状自体はほとんど治まっている（自殺ごっこにも飽きてくれたようだ（ところ構わず放尿するような最盛期は私が二十歳を迎えるまでの約八年間だった（閉鎖病棟への入院が検討されたのもその時期である（父に入院を打診された母は即座に拒否し、父も母の意を汲んだ（とは言え、父が母の病状を正確に把握していたかは不明だ（造船業に従事していた父は香川や長崎、静岡への単身赴任するのが常だったため家を空けがちだった（そもそも昭和気質の彼は鬱病などというものの存在を信じていなかった（私は彼に何度か「精神病なんて、病気やない。そんなもんは、世の中で通用せえへん」と言っただけで聞かされたことがある（二人の離婚調停の過程で知ったところ、母の鬱病は私が十二歳のときに始まったものではなく、それこそ彼女が学生だった時代から延々と尾を引く宿痾であつたらしい（父との結婚、および私の出産と育児に際して服薬を中断していたそうだ（そういつた事実を父が知っていたかどうか定かでないが、もし知ったうえで認め



という点)に於いて断じて容認すべきではない)、彼ら彼女らは作者が敷いたレールを、回し車を駆けるハムスターのように走り続けているだけのだが、彼ら彼女らの不幸はそれだけに留まらず、読者の読解によってレール自体が改変され、時には全く異なるレールを走らされることさえあり、そうなればもはや彼ら彼女らが疾駆しているのは当て所ない砂漠か海上のようで、つまり、登場人物は広大無辺な荒地で作者と読者による二重支配の影響下に拘束され続け、そうである限り彼ら彼女らが自らの意志を表出させることは不可能である(これは私の祖母にも同じようなことが言える(令和四年一月に老人保健施設から特別養護老人ホームへ転居した祖母は既に中程度の認知症を患っており、彼女の中には私を憶えている状態とそうでない状態が併存していた(コロナ禍ということで面会不可の日々が続いていくあいだに祖母の精神はますます内側に針路を取るようになった(一度だけビデオ通話を試みたが目も耳も衰えきっていた祖母に私の声はおろか姿形すら届いていないようだった(そのとき、私は平成三十年一月二十九日に脑梗塞で入院した直後の祖母を思い出した(当時リハビリ病院で歩行訓練に精を出していた祖母にはまだ日常へ復帰しようとする強健な精神があった(しかし回復は遅々として進まず、半年が過ぎた頃には弱音ばかり吐くようになつた(私のスマホには昼夜を問わず一日に十数回、彼女から入電するようになりそのたびに私は彼女が泣き言を吐くのを聴かなければならなかった(そのときから既に祖母は「目えも見えへん、耳も聞こえへん」と訴えていた(泣訴はやがて「もう死んでしまいたいわ」という極言に変遷した(彼女が発した音声を私は未だにはつきりと、思い出ではなくトラウマとして記憶の澱から引きずり出すことができる(私はその言葉を、祖母からだけは聴きたくなかった(祖母と私はかつて、死のうとする母を止める側にいたからだ(しかし私に文句を言う権利などない(何故なら私も死のうとしたからだ(心身が次々と衰えていく祖母は、遂にはそのような嘆きを口にすることすらできなくなった(それでも空腹などといった原初的な欲求についてはいかになく表出していたのだが、閉鎖病棟に入院して以来の祖母は日々のほぼ全てを昏睡に費やしており、もはや他者との交信だけでなく当次元上に意思を表明することすらできなくなってしまった(私はそうなるってしまった彼女の状態を(祖母の名誉を守るためではなくあくまでも自己を慰撫するために)「内的牙城への完全な籠城」と称している(食事すら覚束なくなった祖母には種々の薬剤や栄養剤が管を通して投与されているが、それを彼女が望んでいるかどうかは不明である(かねてより祖母は胃瘻など負担の大きい治療法を自らに用いない旨を同意書で示していた(しかし今現在の祖母が何を望んでいるか確認することはできない(もしか

したら胃瘻を受け入れてでも生き延びたいと思っっているかもしれないし、点滴すら拒否する境地に達しているかもしれない（何もわからない（万事は過去の祖母が指示した通りに進められる手筈となっている（点滴のみでは支えられなくなったときに祖母は死ぬ（そう考えると今の祖母を形作っているのは治療であり、病院である（無論彼女の人権が十全に認められているからこそ、そのような手厚い処置が施されているのだが、一方で内的牙城の中にいる祖母の意思が傾聴されることはない（人権を認めることは、人権を認めない末路を生み出すのだろうか（いずれ私にできるのは現在の状態の祖母を解釈することだけだ（それは、どちらかと言えば作者ではなく読者の営為に近い（私は、既に祖母が死んでいると解釈している（そのことについて想いを馳せるとき、私はいつも祖母と天国で再会することを仮定する（現実問題、私と祖母の行き先は同じではないだろう（別に私が地獄に堕ちることを喧伝したいわけではなく、私と祖母ではおそらく宗教観や死生観が異なっている（祖母は神道系の新興宗教の信者だった（幼い頃から入退院を繰り返さなければならぬほど病弱だった彼女は五十年ほど前、その新興宗教を信じるようになって医者要らなくなったのだと言う（私はそういった体験を信じる性格ではないが、私の知る祖母が常に健康体だったのは確かだ（彼女の信仰心を否定するつもりも卑下するつもりもない（新興宗教だから独自の教えがあるのだろうが私はよく知らない（本当のところ、幼少期には集会へ連れて行かれて共に経典を唱和していたのだが、内容は忘れてしまった（やむを得ず一般論を引くが、神道系の教えでは人は死後、家を守る神になると言う（そう言えば健康だった頃の祖母は眠る前に必ず、神棚に飾った祖父の写真に感謝を述べてから布団に入っていた（「おじいさん、今日も見てくれてありがとう、健康でいさせてくれてありがとう」と言っていた（いずれ天国や地獄、彼岸のような概念とは無縁であるらしい（他方で私もあの世を信用していない（私は、人は死ねば全く同じ人生を無限にやり直す羽目になると固く信じている（発想としては百年以上前にニーチェが譚言のように提唱した永劫回帰のアイデアと酷似しており、目新しさもないから大上段で言い張る心づもりにはなれない（もつともニーチェは無限に続く人生すらも超克することを意図していたようだ（私が考える人生の繰り返しには超克など存在せず、ひたすらに陳腐である（この人生は既に無限回繰り返し返されており、この先もずっとそうである（故に私と祖母は現世以外の場所で交わることはない（しかし、私たちのどちらもが間違っている可能性も大いにある（古代の奇人が断言したように私たちは死後、天国だかあの世だかで再会するのかもしれない（それ自体は、もしかしたら、幸福なのかもしれない（しかしここで問題が発生する（私







楽だろうにいったい祖母はどうして……」と、滔々と語った（いつの間にか目蓋を焼いていた涙が零れるのを感じた（それは医師にも見えていたらしく、私の愚痴を傾聴したあと、「どちらの気持ちも本当だと思うよ」と言った（私は鼻をすすって目をしばたかせ、涙を止ませた（一ヶ月前と違い、落涙を躊躇しなかったのは自らの失敗を認める気になれたからだろう（つまりそれはここ数年間にわたっておこなってきた悪あがきの失敗である（最初に祖母についての小説を書いたのは平成三十年二月一日だった（平成三十年一月二十九日に、祖母が脳梗塞を起こして倒れたのがきっかけだった（もっとも当時は悪あがきのつもりなどなく、純然たる記録のつもりだった（それが徐々に泣き言へ転じて悪あがきとして結実したのはやはり、文学フリマ京都で売った小説を書き始めた令和二年十月頃になるだろう（それまで健康そのものだった祖母は僅か三年足らずで排便の世話を受けなければならなくなり、軽度の認知症も発症していた（そのあいだに祖母の居住地はリハビリ病院から自宅、そして老人保健施設へと目まぐるしく移り変わっていた（私はそのような祖母の転落していく現実についていくことができなかった（だから小説を書かねばならなかった（誇るでもなく応援するでもなく、ただ自流として祖母の小説を（元気だった祖母を（共に母の自殺を止めるために奔走していた活力溢れる祖母を（そして自分に言い聞かせた（自分の知る祖母はもはやいない（敬愛する対象としての祖母は死んだ（私はただ、覚悟を決めれば良い（いずれ儀式として葬送を執りおこなう日が来るかもしれない（しかしそれよりも先に心の準備を整えておけ（寄る辺を失った母が錯乱することぐらい目に見えている（そのとき私まで錯乱していたら共倒れではないか（私たちにはもう、他に親族が一人もいないのだから（だから私は私なりの葬儀を執り行って私なりの弔辞を読んだ（一度では足りなかった（私はそれから今日までのおよそ二年半にわたり祖母というものを書き続けた（無論そこには韜晦を含み、傍から見て祖母を書き続けていると思われてはならない（敬愛の念すら披瀝すべきではない（何故ならそれは死の受容によく似ているからだ（キューブラー・ロスが提唱したプロセスにあやかって否認、怒り、取り引き、抑鬱、受容のみを書けばいいのだ（それが私にとっての小説というものだ（私が「それでも」小説を書く唯一無二の動機だ（私はそれをおよそ三年の歳月をかけて、牛歩の速度であるが徐々に達成しつつあった（私に足りていないのはあと一つだけだった（受容だけだった（祖母の死を受容するプロセスのみを書き損ねていた（その遅々とした逡巡が、いざ祖母が死ぬとなった瀬戸際で致命的な齟齬をきたしたのだ（惰性と諦念による染みを穿ち続けてきたのは畢竟、祖母の死を前に涙を流さなためだった（しかし、このザマだ（結果的



は何事でない風に奥へ進み、私も彼ら彼女らの虚ろな視線をかき分けて前進した（やがてもう一つの鉄扉があった（開いた先はひとけがなく、静まり返っていた（私たちは病室に入った（狭い一室は仕切りで見えないようにされていた（最期のひとときを安らかに過ごせるようにするための配慮であると言う（他方で、他の患者に悪影響を与えないための措置でもあるのだろう（そういう扱いを受けている家族を見るのは初めてではなかったから、別に驚きも不快感もなかった（看護師が仕切りを開けると、そこに祖母が眠っていた（点滴の管を一つだけ繋がれた祖母が（看護師は「お時間になったらもう一度来ますね」と言っただけ閉め、出て行った（沈黙が弥増した（私は祖母に向かってひとまず「来たで」と言ったが、当然反応はなかった（骨張った祖母は洞窟のような口を開けたまま、微かな呼吸を繰り返していた（目尻に目薬の跡らしい赤黒い染みがあり、それさえも乾いている（まるで木乃伊のようだった（無論、ここへ来て品行方正に寄り添うつもりなど毛頭なかった（丸椅子さえない病室で立ち尽くしていた私は何気なくしゃがみ込んで祖母の手に触れた（すると祖母は私の手を驚掴みにするように握った（記憶する限り初めての強さで（そのまま私の手を胸元へ移動させた（一瞬だけ口を閉じた（たったそれだけで祖母は生氣と威厳を纏っていた（日に何度か、床ずれを防ぐために祖母の体勢は看護師の助けで変えられる（そのため、祖母の動きをほとんど不随意的な反応だと解釈するのはむしろ自然である（しかしそれ以上に、祖母の手はひどく熱かった（空調設備の整った室内にずっといる、という理由だけでは説明がつかない温度（それは紛れもなく体温だった（祖母は死んでしまったのだ、という盲信を容易く打ち砕くほどの熱だった（私は咄嗟に手を引っ込めようとしたが、祖母は許してくれなかった（しばらくそのままだった（私は祖母に「ごめんなあ」と言った（祖母は再びポツカリと口を開けて、握力も徐々に緩くなっていった（私は二度、三度と謝辞を繰り返した（何度目かの謝罪のとき、仕切りが開いて看護師が顔を出した（許可された面会時間は十分だけだった（私は取り繕うように、聞こえよがしに「五年後までは生きいや。そしたら三桁やで。役所が銀杯くれるわ」と言っただけで病室を出た（聞こえていないとわかっていたからこそ言えたことだ（帰路、先ほどと全く同じ位置で車椅子に座っている老婆が私を目聡く見つけて同じトーンで怒鳴りつけた（先ほどより倍程度長い言葉だった（私にはそれが「兄ちゃん、売れたなあ」という文字列に聞こえた（私は、血縁関係にある人々の中で唯一、祖母だけが私の小説を読んだことがあるのを思い出した（それは平成二十一年八月頃に書いた作品だった（今と同じか、それ以上に酷い出来映えのものだ（いや、情熱があっただけ、今よりかはまともだっただろう（祖母は苦

笑しながら「私にはようわからへんわあ」と言っていた（あくまでも緩やかな口調だったが脳裏では全ての文字が一挙に泡立つ（そのために記憶を蘇らせたとき、私には振り返って老婆を見遣る猶予があった（私は「売れたかったなあ、俺だってなあ」と怒鳴り返そうとして、すんでの所で思いとどまった（何もないよりは（何もなく他人を傷つけて回るよりは（せめて金に換えられれば悪人面もできたというのに（私はそれすら果たせずに（読まない文字を叩いて（聞かれない謝罪を垂れて（生きていない人生を生きて（そうして、許されざる弁明で許されようとするばかり  
で（）  
（）  
）、壘壘が「結局愛は私たちには配られない。私たちは愛を生み出せるほど自由ではないから。愛を生み出せるのは人間だけだから。愛はそういうくだらないものだから。犬猫に向けられていた愛は奴隷に対する愛だから、次は人間が奴隷になるだけだ。私たちは奴隷にすらもなれなかったけれど」と言ったとき弼弼は「まだ読んでの。どうしてだろうでも、今ならわかる気がするね。だって別に私の嫌悪感だって奴に作られたものに過ぎないし、私がおかを頼んで読むのをやめてもらっても、それは私の言うことを聞いてもらったんじゃないよ」奴の命令に従っただけなんだよね。私以外とくに気付いていたこと」と言い（いよいよ文章の一貫性が保たれなくなってきた（ようやくお前は馬脚を現す気になったようだ（お前がやったことと言えばデニス・アッパーによる論文『「書くことができないこと」の症例に対する自己治療の失敗』の拙い再現に過ぎない（彼が本文に一文字を使わずスマートにやり遂げたのとは正反対に、お前はくだくだしく、三万字超も費やして車輪の再発明をおこなったに過ぎない（見るに堪えないペダントリーの乱発（一つ一つを深掘りするつもりもなく、ただただ読者をいやすためだけの下劣な手段（そもそもお前が騒ぎ立てた空理空論に則るならば（文字として現れた存在が独立した人格を持つならば（私作者などという等式が成り立つわけがないではないか（私こそが「異次元の双子」ということになるではないか（登場人物の人權などと、本当に本当に馬鹿馬鹿しい（そんなものこれまで全く念頭になかったから、お前は臆面もなく小説などを書き散らしてきたのではないか（思いつきの屁理屈を捏ねくり回して自己正当化しようとするな（まるで理論武装を欠いた反出生主義者のようだ（破滅願望を関係妄想によって増幅させたカルト信者のようだ（ペシミズムに基づいた自己憐憫を撒き散らすのはさぞ気持ちいいだろうが、お前の自決に他人を巻き込むな（まるで全ての創作者に罪があるかのように騒ぎ立てるな

(祖母を論った小説ばかり書いて一抹の罪悪感に駆られたお前は、その罪悪を他者へ拡大させて自らの免責を図っただけだ(それがこの一連の唾棄すべき文字列の顛末だ(チューバッカ弁論、whataboutism、マタイによる福音書七章一節から五節『ちりと梁』、そういったもののアマルガム(全く読むに堪えない(腐れ外道が(お前がやっていることは免許も持たずに猟銃を発砲するような真似だ(拙い表現でも他者を傷つけることはできると散々に証明しているだけだ(何よりの問題は(お前が今、少しも泣いていないことだ(紙幅を割いて私に罵詈雑言を言わせたところでお前は何一つ感じ入ることがない(涙を流すことはない(お前は致命傷に至らないよう自傷する方法を心得ているから(手前の面の皮の厚さを心得ているから(お前がこの小説を書いていて涙を流したのは一万二千字ほど前にお前と祖母が結託した過程を書いた、その一箇所のみだ(健勝だった祖母を想って泣いたのではない(まして祖母を小説の題材に扱うという邪知暴虐に罪障を覚えて泣いたのではない(お前は祖母を失う己を憐れんで泣いたのだ(精液のような涙だった(お前は二つ目のタイトルでこの小説をドナルド・クロウハーストの遺書のパロディであることを示唆したが、お前が材料にしたのは自分の死ではなく祖母の死だ(あまつさえお前は自らのドグマに殉じることさえもできない(とやかくとキーボードで打ち込む前に何も書かなければ済むような話さえ書かずにはいられない(だいたい三十三にもなった中年の男が「祖母が、祖母が」とはあまりにもグロテスクだ(内心に留めておくうちはまだマシだがそれを表現するなどもつてのほかではないか(お前はその無才によって北町貫多も秋恵も生み出せず(ケタケタと悪辣に自分を切り売りして、家族を切り売りして、それでさえたった一冊しか売れない(才能が認められることなど今生有り得ない(そのことを悟ってからもう十年以上経っていることにも気付いているだろう(自身の才能の高が知れていることを最初に、小説という形で宣言したのは平成二十四年三月だった(それ以降の十数年でお前はお前の正しさを存分に証明してきた(もう十分だ(書くことを止める(死ねとまでは言わない(意志薄弱なお前に無理難題を呈するほど私は馬鹿ではないから(お前はどうぞせ「往々にして死なないことは死ぬことよりも悲劇である」と知ったような口を利くだけだから(だから書くことをやめるだけでいい(これは私の切実な希求である(希求する理由は次の三つだ(第一にお前には才能がない(お前が現在進行形でおこなっていることは回轉寿司屋で容器を舐め回す動画を撮影した少年とほとんど変わらない(彼が仲間内の反応を得て満足しようと企んだのと同じように、お前も自己満足と駄サイクルのみに資する低レベルな作品を生み出しているだけだ(私はお前が延々書き続けることを擁護しないと同様に、

少年の行為を擁護するつもりはない（単純にお前と彼に似通っている点があることを摘示しているだけだ（いずれも稚拙な表現能力を持って生まれてしまった者の乱心に過ぎない（違いがあるとすればお前が小説という、家父長制的な規範や伝統に庇護された赤子である一方、少年は反体制に目覚めきれなかった幼児であったことぐらいである（言うまでもなく少年よりもお前の方が小狡く、劣っている（第二にお前は他人を小説にすることに何ら呵責を覚えることができない（この小説を書き始めた令和五年一月十八日水曜日、心療内科で涙を堪えたお前は、祖母の死が迫っていることについて自分が驚くほど狼狽しているのに初めて自覚した（自覚し、混乱した（お前はその混乱を千載一遇の好機だと捉えた（自分がこれほどに混乱することなど、今後訪れないだろう、と（言うまでもなく、最も敬愛する者の死は一度きりだ（だからお前はその混乱に任せて小説を書こうと企んだ（普段ならできない所業であろう、と錯覚するために（自己満足するために（全てはお前自身のために（お前ははなから作品に通底する論理を整理し、構築するつもりなどなかった（むしろ自らの現況を盾に混乱を正当化しようとしていた（お前にとっては壘壘と弭弭の境遇などどうでもよかった（私についてもどうでもよかった（畢竟祖母すらも眼中になかった（お前の視野にはお前しか映っていなかった（身をもって知ったはずだ（そのような精神状態でさえ、生み出されるのはこの程度の下等な狂気だけだ（第三にお前という分際は小説を書いている限り人として成長することができない（お前が小説と称してやっていることと言えば内在論理に閉じこもって芋を引くことばかりだ（なまじ自らの考えではなく小説であるとエクスキューズを備えているから他人の意見を聞かなくて済むし、他人も意見を言わなくて済んでいる（そしてお前は引きこもり続け、幼児であり続ける（お前は消去法ではなく自ら選択して内的牙城に籠城しているのだ（軟弱で低俗な内的牙城に（閉鎖病棟にいるのは誰なのか、もう少し真剣に考えてみれば良い（そうした成長の遅延は今更取り返せるものではないが、しかし小説を放棄して社会との接続を増やせばいくらか軽快するかもしれない（以上が三つの理由だ（ここまで仔細に書けば愚鈍なお前も理解できるだろう（ただし、お前は私の希求を吞まずにこれから先延々と小説を書き続けるだろう（知っての通り、私たちがお前に対して請願書を提出したのはこれが最初ではないからだ（今まで両手では足りない人数の「異次元の双子」がお前に頼み込んで、お前はそのたびに足蹴にしてきた（もつともそれはお前にとって請願でなく、自問自答ですらもなく、ただ一時期気を紛らわせるための飲酒のようなものだったのだが（お前がお前に対してそうであるように、私もお前にはつくづく諦めきっている（所詮お前には無敵の人へ転向する

